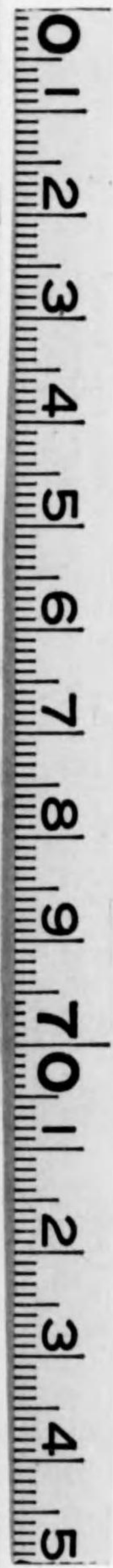
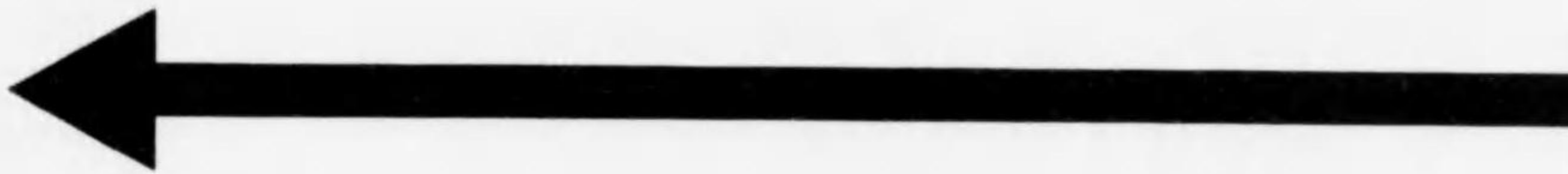


特 274
894



始



雪の地女

特 274

894

美 晴 山 柴



書 叢 人 詩 銳 新

特 274
894



新銳詩人叢書

3



交蘭社版



序

第二詩集「處女地の雪」は成つた。
處女詩集「花と金鑛」以後、最近、僕が新しい主義と主張をも
つて轉身して、詩風に變易をきたした迄の作品を持つて編んだ。

詩に生きる——その一筋の懸命な心で、今日まで生活を闘ひつゞけて来た。そして明日からも亦、盡くるない世俗と戦ひつゞけてゆくであらう。

草臥れて宿かる頃や藤の花

その平安の日が僕にくるまで、僕は街道を東へ、東へ、曙を、曙を、太陽を、迎へるところまで歩みつゞけてゆくであらう。

詩に生きる——その一筋の心で、僕の瞳は豹のやうに鋭く冴えた。屢々髪は獅子の鬣のやうに逆立つた。僕に叛らふものは地に骸をさらし血を流すまで、僕の牙をもつて、その心臓を突き刺さなければ止まないのである。

然し僕は、やはり弱い。弱いからこそ僕はこの念願を持つてゐる。そして、己が心に鎧を着せてきたのだ。

でも——今、僕は「處女地の雪」を編んで、僕の詩生活に第二の曙を迎へようとしてゐる。そして今迄孤獨であつた僕にも、今日では横山青娥といふ得難い良詩朋さへある。

僕は行く、明日も明後日も、僕の拓いた道を……。

この一卷は故友詩人青木茂若の靈に捧げる。茂若よ、永遠に僕を愛し護つてくれ。

杉並町阿佐ヶ谷の寓居を離るゝ日近く

柴 山 晴 美

目次

序

處女地の雪

新らしい家	三
竹を割る	六
手風琴の唄	八
秋蟲を聴く	二
朝の墓場	四
七月の田園	六
桐の花どき	八
浪漫の炬火	三

閑庭の初秋……………二四
 明日を約す……………二六
 木賊の野……………二九
 登音……………三三
 薄明の回想……………三四
 凍る月明……………三七
 棺の集……………四〇
 祖先の思想は海から誕生れた……………四三
 鐘……………四四
 秋河凝視……………四六
 水平線は光る……………四八
 閑庭冬夜……………五〇
 落葉の賦……………五三

寂心哲學

淺春……………五七
 六月の鶯……………六八
 幻夢に生きる……………六〇
 鷹は飛ぶ……………六二
 杏……………六四
 朝……………六六
 殉情哲學……………六八
 味爽の思想……………七〇
 山童女禮讚……………七三
 河原楊……………七四
 午砲……………七六
 路傍哀唱……………七八

蒼空よ	八〇
祖先の夢	八二
靈澤讚唱	八四
驟雨小景	八六
旅を想ふ	八八
靜謐の秋	九〇
寂心哲學	九二
魚と河水の秋	九四
青春の喜悅	九六
冬華孤香	九八

日曜日の午後

桃園の春	一〇三
風の生れるところ	一〇四

樹木	一〇六
釣魚	一〇八
希臘模様の壺	一〇
紫煙	一一三
秋日	一二四
月の花火	一二六
寥秋嘆思	一二八
定住	一三〇
秋情點景	一三三
海邊の寂寥	一三三
日曜の午後	一三四
忘れられた玩具	一三六
便りの來ない夕	一三六
寂心遊歩	一三〇

處女地の雪

南風の頃	一三二
藤花煙雨	一三四
朝を生む	一三六
雲雀	一三八
山と空	一四〇
塑像と蜻蛉	一四二
冬の顔貌	一四四
花苑廢情	一四六
六月の曲譜	一四八
盲者	一五〇

新らしい家

——音響ほどかすかすの想念を湧起させるものはない——

風が吹く、

吹き流れてくる音 時計の時鐘だ。

張ちきれるほどの弾條はじのうつつ力の響だ、

いつのまにか

野中に家が建てられた。

朝とほつて 夕方またとほる、

右も左も 蘆原の

この頃は穂に出て光る草原の、

ひとすぢ幽かな路を歩きつゝ
私は新しい營みの氣配をきいた。

穂ゆれ葉觸れのあなたに
明るい窓の灯 なびく窓掛、
見知らぬ子供らの影もうつる、
アンテナの竹も夜空に青い家だ。

夜明けになれば鶴も来よう、
宵には新月も軒庇を覗かう、
年を経て 生籬の枳殻が
高く厚く繁るころほひ、
可憐な戀が こゝに誕れて

歎歎や笑聲が 悲哀や歡喜が、
今はもう木の香の失せた家ぬちに
満ちわたることであらう。

竹を割る

夕陽が透く

孟宗藪の竹の青さ

艶やかにひそめきわたる肌の柔らぎ。

づつくと刺せば、

裂きわれるいつほんの竹の節に、

若さと伸びの生命が

光と音を放つ 凄じさ。

ば……らその藪の葉を飛び立つ

利羽のそろつた仔雀のわなゝきよ。

青い竹幹の向うに山脈は遠い紫、
割れた竹の生々しい膚のV型の間に、
はつかの葉を噛む涼しさに似て、
ほろほろと暮れ残つて見える俊峰が——。

夕陽が消えた

孟宗藪の竹の静かさ、

りんろん匂ひわたる肌の艶めき。

新月に細葉も光る。

手風琴の唄

妹よ 静かな今日の夕餉どき
僕はたうとう聴いてしまった、
お前の胸に手風琴が鳴るのを
あの童話のやうな青金の音いろの鳴るのを。
國境の峠をこえて（十幾年も前のことだ）
吹雪が去つて 月魄の澄んだ夜
旅の男の寂しい微笑が扉口に現はれた
時刻を忘れての經驗談、
暗い洋燈の灯明りで

冷えた炬燵の炭をついで……
彼の弾く手風琴が涙に濡れて光つたさうだ。

むづかつては寝ないお前のために、
亡母はよくあれを鳴らした 夜更けに起きて、
僕もまた蒲團のかげで眼を覺まし
そつときいた あの手風琴の唄を、
乳より甘い 母鳩の含み音より優しい響を、
愛と浪漫のあふれる唄を、
旅人が感謝の記念に置いていつた
あの古風な樂器の震へを。

妹よ お前の黒髪が手の一握に餘る日が来た。

永く土蔵に忘れられてゐた　あの手風琴の唄が
お前の胸でほのほのと曙の鐘のやうに鳴るのを
僕は聴いてしまった。
夕顔の花の生籬のそばに立つて
外を通るひとの姿を見るお前の瞳射しに、
あゝ　僕はたうとう聴いてしまった。
お前の青春に鳴る樂器を、
あの縹いろの夢のみちみちた顔を。

秋蟲を聴く

—— 野口米次郎先生に ——

雲は重疊する　空の最中に
昨日も今日も恐らく明日も。
待ち望んだ爽快な蒼空は、
何時かへつてくるのか……雨
雨、繁吹く雨　霧ふ雨。

その氷雨に似た暗鬱なたゞよひに
いつか夏は老いて行つた。

(りり、りり、ちり、ちり、)

ひとすぢ朗かに 宵々の晴れ間を、
地底から呼びかける聲をきく。

あゝ その秋の讃唱を聴くと思ひ出る、
くゆらかな静謐を湛へた大氣を、
光を吹き削る風の寂しさを、
ばらばらと心に彫り込む時雨の音を、
そして理智を焚く落葉の煙を――。

あゝ その秋の讃唱は 眠れる私の心を醒ます。
秋の詩人であつた遠祖先とほつゝあやが甦る、
咏嘆藝術の寶石を抱いた血脈の祖が生れる、
しかも彼等は告げる 默示の言葉をもつて

艶麗と絢爛な秋の創造を――

雲は重疊する 空の最中に
今日も明日も、恐らく明後日も、
でも もう何所かに秋の氣配が
静かに流れてゐるのだ……雨
雨 旋轉する雨、吹きよどむ雨。

その氷雨ひこりに似た暗鬱あんうつが醸す
哀愁と悲苦の調律のなかから、

(りり、りり、ちり、りり、)
ひとすぢ呼びかける 季節の聲を
先驅して識るよろこびに私は震へる。

朝の墓場

處女よ かう呼びかけたいほど
丈のびたいとしい妹よ。
ほけてとぶ蒲公英の白い絮毛を追うて
そんなに寂しい瞳をするな、
憧憬を暫らく捨て、僕と行かう。

さうだ 時刻は石さへ泥土に化する。
人間の脆弱な身體などいつだつて腐つてしまふ、
木洩陽はちろちろ唄ひ
喜悅は墓石の苔に花を咲かせる、

雑草も生きの心をもつて匂ひ
藪鶯も明るく強く ゆく春の記憶を鳴くよ、
墓場とて恐るゝな
一切の青春の來歴が
限りなく埋没してゐるところだ。

處女よ かう呼びかけたいほど
丈のびたいとしい妹よ、
魂もとけてしまひさうな清らかな朝の光に
思慕と憂愁の假睡から覺めて
眞實にして度ましい生活を思ひたまへ。

七月の田園

あまりに鮮やかな青緑は
僕を心から疲れさせてしまふ、
陽に耀く七月の田園は
あまりに強い反射光線。

麥生は黄色に病んで
畑丘も乾いて土は白い、
雲雀が老衰の聲を
たよりなげに光の空に 青く吐く、
この七月の光線培養で

桑の葉は柔らかにすんすん育ち、
蠶らはこの葉を食べたばかりに
蠶室に白い絲を煙らせて眠る。

あまりに陽が強くながれて
鮮やかな草木の青緑が蟲類の膚のやうだ、
一匹の小さい人間である私は
身體が透^す蠶^さになつてしまひさうで
風の中を飛び交ふ二番仔の燕の
うす黄の嘴をすら恐れてゐる。

桐の花ごき

桐の花 そろつて咲いた、
朝涼のひかりの畑に 茶の樹の間に。

風がきておくつてくれる香を、
籬を越えて揺れてくる愁ひを
よく聴かう 心を澄まして
竹縁の冷たいのを踏んで……。

数年まへ いく日も病んでゐたころ
部屋にくる 祇園祭の遠いどよめきに

ふつと憶ひ浮べた 幼ない日のことを、

(長い袂のあの娘とふたり)

蝸の鳴く音をきいた、梧桐の肌の青さだ
欲しいなとさしのべた青白く瘦せた手に
母が梯子で折つてきてくれた花の紫。

桐の花 そろつて咲いた、

近くの家は雨戸が降りてゐて何處もまだ静かな眠り。

ひつそりと見てゐるのだ鈴形の花を。

と聞えるのはなんだらう……

まだ星が残つてゐるさうな空が

垂れかゝつてゐる向うの林で、

露に冴えた青葉の樹陰で、

あゝ呆^ばけて鳴く朝の木兎　ろんほうほう
寂しい聲音。

浪漫の炬火

朝から降りはじめた雪、
天の彫刻からけづられる大理石の飛沫が
からりと溜^たつていつた夜の蒼空は、
磨かれた寶石より美しく透いて
野菊のやうな星々の群は燦めき歌ふ。

何所からか風は運んで来る
早咲きの織^ま奢^やかな沈^し丁^{てい}花^かの薫^かりを
幽香は遠い日々を柔かく泛べる
その思出の果敢ないゆらめきのなかを

下け髪の少女は白い素足で走つて行く
點々と大地に落ちるこの花の粒々だ。

笹鳴りと頬をうつ冷たい光り

しみじみ見れば三坪の庭である。

木の板に 屋根に 眞籬に

さつと積つた雪の塊り、

その上にうつる微光は星々のかけか

いな、痛恨のうちに降り出でた

若い日の情熱、顫へる愛の粉雪である。

今、現世の青褪めた哲學に凋れた心は
皺だつてゆく手を眺め、

せめて浪漫のあかるい炬火を焚き、

奔流のやうに胸に溢れる寂寥の底から

早春の大氣を仰いで たづねる、

智慧を 瞑想を 敬虔な祈禱の姿を。

閑庭の初秋

水いろの霧のなかから

澄んで響く時圭の

冴えた鐘の音は六つ、

……茶の毛の猫が足を滑らし

露にぬれた庭石の苔の上を歩いてゆく。

噴井の水が滴りおちる池は

味爽の空をうつし、明星を震はせながら

八つ手の明るい花を仰ぐ、

……金魚は水底で寂しい瞳をして

秋の訪れを幽かにうつしてゐる。

灯の消えた石燈籠のかけに

枇杷はもう小さい堅い蕾をみせて、

父が起きたのか佛間から香の匂ひが流れる。

……孤獨で憂鬱な顔だらう私も

温雅な大氣に總身が溶けてしまふ。

明日を約す

松林は暮れ、風は凍つてきた。

鋭く細く牙へた松葉に

びんちりり たゞくは青い雲の火花だ。

しら茶けた砂丘の遠方に

海が鳴る、底に呻く魚介の合唄を含んで、

ゑぐるやうな凄惨な潮騒が

跳む空に反響し、地にはふ灌木を震はせる。

松林の枝々は凍つて

鋭い葉尖は小鳥の胸を刺し貫く、
點々と血潮はしろい砂にしたより
やがてそこに眞赤な野茨が實る、
籤柑子がいろづく。

だが瞳を凝らせ、

樹間をすいて膨れてゐるは

月の出の水平線だ。

一抹のあの揺蕩は

時代の薄明が誕生れる姿だ。

起ちあがれ、親しい朋友よ、

いつさんに小犬のやうに砂丘をかけのほつてゆかう、

地を敲ち、草を叩いて、はねかへる青い焰の中を、

雲が物を焼く激しい音のさなかを、
明日の、明日の輝かしい仕事を約するために。

木賊の野

山頂から 麓へ

いつばいに生え立つこの木賊をみてくれ。

鋭く透きとほる青い莖の實が
ぎつちり ぎつちり 鳴るのをみてくれ。

この珪酸の粗硬な繊維のあふれに
私の身体までびんびんに固つてくるのをみてくれ。

ほれ 手の指先から 心臓の中まで
彫塑のやうにこちこちに白灰しろちやけてくるのをみてくれ。

激しい植物の匂ひは水の情緒がある
な、私の皮膚かみがみんな川魚のやうに冷くなつてくる。

この木賊の密生した谿間を私は走つてくる
いつの間にかひとすぢの流れのなかにゐる。

山頂から 麓へ

しぶきをたてて躡つてゐる木賊の愛情をみてくれ、

夕陽が私の細長い身體かみだでこしらへる影が

銚杉を超えて 隣の山にうつるのをみてくれ、

身うちをふるはせる堪らない衝動しやうどうに

ひろつて さつと投げる一個の石塊をみてくれ、

驚よりもたくましく大空を裂いて

遠い部落の上にとゞき落ちる木賊の感覺をみてくれ。

登 音

静かな静かな登音が訪れて来る。

智慧の蒼い光が漲つた空の下を、

……冴えた横顔を風にさらした者だ。

私は悦びにむせんで書齋の障子をあける、

逸早くその律調に觸れた自然の

度しやかな装を見るために、

唇を流れ出る再生の詩は、

止まるところも知らないのである。

登音が聞える、ほらまた聞える。

小止みない静かな登音が聞える。

智慧の蒼い滴がしたゝる時、

精神のなかを秋雨が濡らす時、

忘れてゐた眞實を胸に取り戻して

醇々と生命の貴さを私が悟る時、

豫言者の訪れの静かな登音が聞える。

平安と慈ひのゆるやかな登音が……。

薄明の回想

風は夕暮を呼び 鱗雲を吹き消す。

空は星々の鋭い憂鬱な光に眼覺め、水面にうつる。

山深く尋ね来て 私は

ここの湖畔に凋れた夢の炎を焚く……。

地を埋めた草々の最後の聖餐よ、

ひとときの生命に明るみ

縁に映えるこの叢群のむかうに、

湖は震へる 宿命に青ざめた使徒の額のやうに。

私は深山の薄明が好きだ。

鳥が羽搏いてゐる黄ばんだ落葉松の林、

音なく吹雪が舞ひあがつてゐる遠山脈、

谿々がふきあけてゐる水いろの雲だ。

莊嚴にして寂しい「死」の陰翳が胸を閉ざし、

私は四圍の静かさと孤獨に嘆くのである。

陽光はうそ寒く冷えて来た、

明日はもう、太陽は黄金の果實より小さく

あるひはこのまゝ曙にならないのかも知れない。

(私は頭をたれる) 私は思ふ。

水にうつる鳥影より果敢なく私から離つた青春を。

旅にきて旅の歡喜をうたはない。
深まつてきた夕闇のなかから、
鈍く錆びる湖の水に、
虚偽と瞞着と裏切と冷血との
いきどほろしい回想を紡ぐのである。

凍る月明

凍る月の光は　あまり明るく、
海の上の星斗が幽み
天狼星も馭者座の星も朧ろけである。
霜が積んで枯蘆は碎金の音を立てる
眠られず千鳥は嘆く、その草蔭に。
嚴冬の海近き河口の三角洲のほとり
沖にかへる舳のなかに船員の述懐も消え
船唄もその唇を洩れない、
澄るゝはたゞ潮騒の匂である。

永劫の渦が奔轉するなかに
渚の石礫は呟く海の祕密を。
だが月光にその言葉も響なく凍り、
深夜隕石はつらなつて海に墜ち
蒼い炎をあけて燃える、
映畫の爆破のやうに沈黙に聲無く。

魚族は海底に生きて
瘦せた背を寂しく並べ、
氷片のやうに水面に籠る明光を
ひとしく瞳をあけて靜かに覗ふ。

その夜、挽歌の縞々と悼しい流のなかを
水仙と槿に葬送られて波の秀のごとく
一刻水葬の白い棺が浮ぶ……
翌曉たゞその寂寞を告げるは
出洲の砂上にあけられた、
ひとひらの白茶けた花瓣である。

梢の巢

時雨が来る 葉を敲いてわびしい時雨が。
夜、樹梢を傳つて數限りない處女の群は
靜かに蒼冷な大地の上へ降りる。
風は素早い脚を此所にとどめ
秋の訪れを寂しい聲音で告げた。

日毎夜ごとに、落葉は地に埋れ
日毎夜ごとに、青い女らの合唱は
冷たく鋭く空に震ふ。
露はになつた梢の巢の中で

戦慄つゝも小鳥は耐へる
忍従の星を額に戴いて……。

雪が来る 間もなく激しい吹雪が
吹き折れる、高い枝梢よ
凍み割れる 冷たい幹立よ
巢は揺れるちぎられるばかりに
たゞそのなかに暖かい胸毛が擁き合つて
血縁の盡きせぬ哀歡を交はし乍ら
夜をこめて苦惱の小さい瞳は
曉の微光を捕へようと鋭く冴える。

祖先の思想は海から誕生れた

黄昏の海峡に 蒼茫の濤間から
音もなく新月がのほつたり 隠れたり、

水苔の着いた岩礁を嚙んで
海は薄明のなかに深い陰翳をつくる。

私は厥處そこに聖者の偉なる約束を受ける
私は其處そこに神祕の聲なき啓示を觀みる。

背負ひ切れない運命を負うて

おゝ野を越え山を越え たどつて來た海。

私は祖先の忍従を識り
私は民族の悲寥を懐く、

夜更けも目覺めて砂丘を歩む
月に孤獨の影を曳き 水沫に總身を濡らせながら。

鐘

時計臺の鐘がなる。

巷の柳の葉芽はしづかに眼覺め
芹は花咲く、野なかの流のほとりに、

(早春を報らせる唄だ)

幼児も、青年も爽やかに起つて
細く鋭い鐘の震えを受けとる、

しゆりしゆりと針は巡つて

月がなける蒼い翳も動く

白い時字盤の上を走るは誰か、
鐘をつくは青春を憎む侏儒の群か。

時計臺の鐘がなる。

朝夕の 冴えた二月の空に

幽閉された意志の嘆きが吹き散る、

(早春を報らせる唄だ)

老いたる人々も澄心して聴き

むしなく逝つた若い世紀の海を顧みる。

秋河凝視

懐しい河水よ、

沈黙の最中を流れ

空の青をうつす静かな河水よ。

水底の石に揺る魚の影も稀で

漂ふは 泛ぶは 水苔の小さな葉である、

味はつてみたい清鮮さは

岩に碎ける白い泡沫にも擾されない。

人間同志の醜い闘争も捨て、

野望も、愛する悲みも忘れて

孤り黙然 お前とともに

遙か遠い彼方に流れてゆきたい。

懐かしい河水よ、

母の慈愛のごとく流れ

静謐に清らかに溢れる河水よ。

水平線は光る

丘陵の芒を踏みしだいた
登音のひとつはいつか消えてしまつて
草かけの水溜にわびしくうつるは
禾本科の秘かな花瓣である。

黄昏の光のなかを

ひとり丘に登つてゆくと、

不思議な夢が心にのこるやうに

遠く遙かな潮騒が

後の林の木々の葉を揺り 果實を揺り

忘れた聲を胸に揺る。

だが鬱憂がひとすぢの翳を地に曳けば

雲を破つて陽光は水面に

聖者の俤を彫る。

落日の一瞬

幻影に身を溺らせて哀憐を捨て

小徑に立ち私は遠い水平線をみる。

憎悪も怨恨も、傷ましい追憶をも捨てて、

ひろびろと豊かに人の胸をうつす

水平線をみる。

閑庭冬夜

月は照る中空に

八つ手の葉に霜がもう降りた

風に光るは その冴えた明光だ。

隣家から風鈴の唄が聞える、

生き残つた叢陰の蟲のよに

ちりちりと壊れた夏の生活を歌ふ あの音調が。

風が過ぎる——八つ手の葉陰の蜂の巢は

ひと夜を籠めて揺れてゐる。

廣い葉も蜂も眠れず ともかくに起きてゐるのだ。

また強く風、空に響いて渡れば

身にせまる冷たい月光と霜に覺めて

蜂の子は夜更けに母と

風鈴の哀調を聞いてゐるのだ。

落葉の賦

静かな暴風のやうに地を敲つて
落葉松の群林の葉が散つてゐる。

(丈高い白樺の枝から小兒の掌に似て

あの日も葉が降りしきつてゐた)

私は今首垂れて沈黙の路を歩いてゐる、

巖々たる山嶺の茜雲の映えが

枯草の原を燻らせて嘆きの唄を囁く。

喪失した珠を追ひかける愚かさは捨てゝも

青春の日の哀歎の深さは忘られない。

度ましく花咲いた萩の垂り枝は
昨日の夢そのまゝ
君の横顔を稱へ乍ら仰ぎみた並樹も
枝梢の數さへ違はないのだ、
私は 今 首垂れて沈黙の路を歩いてゐる。

鎧屏を閉め忘られた山の旅館の

たゞ一つの玻璃窓に夕映えが寒く、

窓枠は黙つて見おろしてゐる

黄いろい落葉の翼に埋められた池水の光を……

私は想ひ出をたどつて

此所まで歩いてしまつたのだ、

空に地に草に家々に私は見る

遠いひとの俤を
私は聴く 遠いひとの聲音を。

靜かに踵をかへして忘却の路を歩かう、
私は眼をつむつて先哲の戒律を思ひ
感傷を打ひしぐ叡智の冷たい額を憶つた
あゝ 散る 散る 散る
無心に 異もなく 頬をたゞき脊を打つて
落葉が散る 高原の林のほとりの徑に
私は精進と飛躍の路を歩く爲に戻らう
さうだ四肢に健康な精神を漲らせるために。

寂心哲學

浅 春

日向の土堤のしづもりに
風は凝つと佇んでゐる。

乳離れした仔山羊も
青草の香氣を聽いて遊ぶと云ふから、
打ち連れて人性達よ、

——空を磨く白雲を見ようではないか。

風は 言葉を持つて来て
土堤の日向にまづ憩んでゐる。

六月の鶯

樹梢を吹き折るほどの風のなかで
鶯は歌を止めない。

切々たる思慕の情に身を焼く鳥は

青空の青きに溶け入りたい心である。

離れゆく肉親の運命も考へない、

たゞ心象に焼きついた愛人の佛に身を悶え、

山腹の笹群の上を渉りあるき

峽谷の杉林の間を縫うて飛び

激しく歌をつゞける。

咽喉裂けて血が土塊を染め、

卵茶の胸毛を染め靈を染め、

その額が寂しい運命を言葉なく告げると、

眞實、孤獨に冴えた瞳で

鶯は初めて子孫のため

敬虔な獨唱を歌はうとするのである。

搖籃の唄を囁やかうとするのである。

幻夢に生きる

旅舎の窓をひらいて
蓮花の咲く朗らかな音を聴いた。
散る花瓣の秘けさを見た。

狭霧が憂愁より重い朝、
情愛に背馳した女の白い佛をみ、
惱ましく終結つた戀の末路を見る。

焦心の巷の塵埃を逃れて
遠く來た旅舎の窓に、

友よ、宿命の盡きざる象を
人生の寂寥の相を見ようとは。

池畔の葡萄棚を吹いて渡る北風、
その足並に裏がへる白い葉裏に、
今、金の秋意が忍びよる
—— 歸去來、都巷へ
何事も恨まず、何事も嫉まず生きよう。
ほのかな仄かな幻夢のなかに。

鷹は飛ぶ

山嶽を喰ひ切るほどの

敏捷と輕快で鷹は飛んだ。

落葉松林の向う

亢突の岩石が並ぶ山嶺をかすめ

燦爛と輝く蒼空の光のなかへ

颯々と鷹は飛んだ。

若い若い愛情は躍つて

恐怖や破滅を知らない翼は

建設と榮光を夢見て燃えてゐた。

小さく果敢ない人間の生命は

亂朶の秋草に埋れる蟲よりも傷ましい。

だがその躍々とした意志のみは

蒼空と山嶽を喰ひ破つて

止まりしらない飛翼をつゞける。

杏

風は力をこめて杏の樹の梢を吹きとばさうとする。

「落してはならない

私は太陽の恵に實つたのだ」

杏の實は小さいが確固たる聲で云ふ。

子供は滑らない樹幹に

巧みに抱きついてのほる。

口唇の中にもう唾が溢れてゐる。

熟れた果實は消極的な道德をすゝめて

捕られぬやうにたゞ樹梢にすがる。

母が樹の下に立つて子を呼ぶ。

子供はその優しい威嚇を恐怖れない

杏は可憐な勇者の手に陥ちる。

見よ、風は慌てゝ吹きなほすが

純真な掌で果實は振がれてゐる。

朝

霧が立ちこめてゐてもいゝ

潔きよく雨戸を明けよう。

薄明の光りのなかで

弟妹と向ふ朝餉の膳の静かさ。

新らしいエブロンに水いろの影があり

紅頬に健康のほゝゑみが揺れてゐる。

觸れ合ふ陶器のしめやかな音も

銀罐のたぎる松籟のやうな響も

心の隅々に浸みこんでゆく。

美味はないが肉親の愛情があり、

清楚な心の交換がある。

ひそひそと喫む朝茶が濟んで

霧深い未明の膳を片付けよう。

小鳥の啼く音が遠く流れてくる。

殉情哲學

「眞實愛してくれる人が何處かに居る」
さう信じてゐるほど
深刻な寂寥と歡喜を受けるものはない。
夢と憧憬に充ちた春の日
孤りの家居いへにかく眩き
空しく時刻を消し去るのは愚であらうか、
不思議な意志がはびこつて
獲を遠く追ふと云ふのである。
現實の冷たい嵐から身を護るのである。

「眞實愛してくれる人が何處かに居る」
天涯の星をのぞむやうな心持で
かう信仰の青い火を焚くのだ。

何事もない青空をのぞんで、
孤り外と面に出で幼童と
戯れて時刻を消し去るのは愚であらうか、
不思議な意志は手をのべて、
殉情を堅く抱かうと云ふのである。
宿命の哀歡の星を呼ぶのである。

味爽の思想

秘かな幽かな風の路は
花苑の孔雀草の柔軟な點頭に教へられる。
あるか無きかの朝霧の歩調は
杏の黄な果實が散墜して地に近くとき
黄金のま直な線でいく筋も断られる。

(味爽の思想)の寂しさは水のやうで
時計が夢幻の中から四時を響き出る、
蒼く冷たい葉陰では蟲も沈黙し
涼しさの極みで朝の祈禱して

翅も心もしとゞ露に濡れる。

かゝる朝 私はいつも
繕かれた薄い手觸りの「唐詩選」に
この季節の閑雅な詩情を聴くのである。
何所かに星の匂ひが煙硝のやうに残り
雲の群のみ空に揺動する氣配が感ぜられる、
私は刻毎に、東方の哀歎に身をゆだねてる。

山童女禮讚

野菊のやうな山の少女よ。

數人の朋の瞳の隙に

秋香のみなぎつた栗果をくれた少女よ。

素早く蜻蛉のやうに身を交して

掌の中に數顆の

秘やかな愛情を暗示した少女よ、

十四になつたら秋の金光が寂しいと

朗らかに云ひのけた少女よ、

寂寞の風象のなかに、黄褐の叢のなかに

味爽の星の爽さに輝く

野菊のやうな少女よ。

十四になつて物象の悲哀を知るのか、

朗らかに清淨に育てよ、

涯知れぬ憧憬の日々に

惜しみなく自然を喰べて育てよ、

山は千古不動の慈愛をもつてゐる、

その節操の堅さに人間は打たれる、

少女よ おんみの心象は

和らかな絹衣のやうに私を包む、

赤裸々な愛情をいとほしめよ

咲きたての露しとゞの、野菊のやうな山の少女よ。

河原楊

禽鳥がきて止つて

柔らかくしなつた河原楊の枝である。

水藻が蒼く生えて

小流れながら冴えた河流に

午前、子供らが遊びに来て作つていつた

木片製の水車がぐる／＼と廻り止まないで

斑點のある小さな魚が

さゞなみの中を一尾泳いでゐる。

すつと軟つて水面に微かにふれた枝の端で

禽鳥の羽はさつと光る

支那の山で生れた寶石のやうに。

陽はいちやうに暖かく輝いて

河原楊の新芽がうすうす匂ふ、

遠い風景の吊橋を揺つて

快活な歩調で少女が通り

その静寂な動搖が

空気に波紋を描くので

あるともない微風が頬をうつのである。

午
砲

午砲が澄青の空に鳴つて
明るく反響してくる。

私は山茶花の樹の下に立つ
瞬間の沈黙を味はふため。

今日の花は昨日の風を恐怖しないが
目白の嘴に死んでゆく白晝。

詩人は永遠をめざして生活するが

明日の生命をも知らない。

詩は午砲だ、

瞬間火花を散らして人の胸に鳴つて消える。

路傍哀唱

雪に埋れて

眠る家を失つた小鳥が、

白い胸毛の二羽が、

堤の枯叢からぶるうつと羽搏いて出た。

(鳥に愛情を失はせたのは誰か)

人間を恐怖せしめたのは何か)

今 翔け立つても、もう日没刻だ

寒風交りの雪は

巢を樹梢から杳かに隠して了つたらう。

一夜の安居を求めた此の叢を
私がおびやかすと思つたのか、

ぶるうつ……と飛び立つて

行途知れずなつた

流轉の哀しい小鳥

その寂しい羽搏の音は今も耳に残つてゐる。

(鳥に愛情を失はせたのは誰か)

人間を恐怖せしめたのは何か)

蒼空よ

人を信じ 人を愛する心が

奥底から覆つた日、

苦澁と煩悶の中から仰いだ蒼空の

如何に涯無く澄んでゐたことよ。

通り過ぎる鳥影もない、

瞳を奪ふ陽光もない、

實に牙々と澄み切つて懸つてゐたことよ。

手に觸れる物を破壊し汚損したい

狂暴な野獸のやうな心に、
唯一つ近付きがたい懐しみと愛情をくれた蒼空よ。

祖先の夢

私は天空の紺碧に幻を描く、
私は東洋人の哀歡を其處に盛る
奥の奥に秘むるものを翹望する。

この冬枯の大地に骸を埋める日も
冷たい雪崩が墓石に響くのを聴く日も、
なほ、祖先の生活が正しいことを信ずる。

私は際涯ない憧憬の泉を止めない、
白晝、戸外に立つて嘲笑の洪水を送られてもよい。

私は盡きない意志の振る鞭を捨てない、
朝暮、室内に擁して迫害の暴風雨を投げつけられてもよい。

原始の彼等が一朵の花と
一片の人間の情愛を慈しむ
その岩穴よりも、その生命よりも愛したのを信ずる。

私は大地の彼方に夢をおくる、

私は神話の爲に血みどろになつた
東洋人の寂しい足跡を憶ひ、
夢と美に生涯を支配させる。

靈澤讚唱

おほひかぶさつた頭上の樹葉を透いて
水底から仰ぐ上方の光のやうに
濃霧のみちた空は
灰銀の光が閃めいてゐる。

苔蒸した岩は源を語らないが
不思議に岩間から清冽な水玉が湧く、
此處には小魚も棲まない
底の礫は千年の興亡に
人々の口唇を濕ほしたことを知るのみ、

樹枝から落ちた青い果實は
靈澤に沈んで自然の攝理を哀しんでゐる。

山を巡る狭霧が
いねまの清爽な嵐を思はせて
佳人の白い頬を流れる涙を偲ばせて、
寂しく静かな歩並でくるので
私は清泉の揺れ光りを幽かに捕へ
盲の魚のやうにこゝに黙し佇立してゐる。

驟雨小景

去つて行つた驟雨の心は
そここゝに水溜となつて残つてゐる。

震へる想ひに水が高處を愛しめば
青空も蓋々と覗きかゝる
枳殼の籬をくゞつて
迷ひ來た鷄の白い一羽は
卵黄色の嘴を水溜につけて
落着いて青空を飲んでゐる。

遠山脈に驟雨は
電光を閃々と残してゐる。

旅を想ふ

陽のしみた雑木林のはづれに
清楚な馬鈴薯の花が
紫色の夕靄をうけて細かく揺れてゐる。
鐵道線路の土堤下に
黙々と雑草の深く群れ生えて
童話の幻燈のやうに月見草の四瓣の花が
無限の回顧を斷續させて開いてゐる。

音もなく信號標識燈が青に變り
洋風な柱の上に孟夏の五日月がのぞいて

一沫の雲の流れを抱いてゐる。

(遠方から旅愁を盛つて汽車は近づいて來るのだらう)

この夕嗚咽する程疲れて、
隙ない生活を哀しく憶ひ出て
孤影 この風象のなかを横過ぎるとき
堪へ難い旅情に疲れるのである。

静謐の秋

絲萩に綾羅と

夜目にも瞭らかに夜露の亂れがある

風脚は微かな蟲聲を杜絶えさせて

漆黒の庭隅に隠れてゆく。

素直な心の満ちた秋

水色のおほひをかけた電燈は

庭の蘚苔に斜光を投げて

隠沼の水のやうな静謐である。

群つて來た知己の便りは

生籬をこえた郵便脚夫の手によつて
秋冷の情感を強く胸にうちつける。
そこで燈光のもとに

秋草の綠爛の

秋草の清雅のその氣の中に
限りない歡喜の溢れを身に受胎する。

激しい争鬭の巷裡から身をひいて

靜かな風韻のうちに

絲萩の亂れを熱愛するとき

秋夜は人間への慕情をひとときは募らせる。

寂心哲學

夢を忘れて了つた人間が
日向の椽で晝寝してゐる、

螺旋の切れた時計は
時鐘を打たないので静かさの極みだ、

時計の無い家屋は
路傍の棄石の沈黙さを持つてゐる、

餘り貧しいので夢を忘れたか

子孫も一列に呆けた顔をしてゐる。

遺傳や因襲の血を棄てよ

新しい時代は現實の夢を憧憬してゐる、

神祕論者にならなくともよい これからの詩人は
静かに落着いた言葉と愛情を語るのだ。

魚と河水の秋

魚のすがしい姿も日毎に消えてゆくのに
澄んだ河水は何を黙想して流れるのか、
夏陽の滯に群つてゐて
支那の寶石の彫刻によくある姿や色彩をもつてゐたのに
煙硝の香の消えるときの如く
下秋の深みに何所かへ忽然と消える、
苔深い洞窟をもつ岩陰にも
一枚の片鱗も残らない。
梁は金風にたゞさらされ
視番小舎の藁扉も閉され

河水のみふだんに落ちてゐる。

(煙のやうに現はれてまた消失する人生があるか)

浅瀬に白い肌を露出した石は
涸れてゆく流れのうごきである、
管て魚腹に磨された想ひを認めてゐるが
今は秋陽の憩ふのみだ
處女の瞳のみづくしさに泳いでゐた
魚の姿が日毎に減つてゆくのに
河水は唯澄空をうつして流れやまない。

青春の喜悅

谿陰にひそみて

日晝の星を數へよう

青春の日の喜悅を數へよう。

崖際の蔦が霜に縮んで赤く染る秋

獵夫の銃音が鳥獸の胸を畏怖する秋

風雨が岩を蝕んで白く乾く秋

心象に忍びよる未知の處女の懐かしい秋

陽に翳してよむ遠方人の書簡の親しい秋

寂寥の湧きくる谿間に空を仰いで

白晝の星を數へよう。

滾々と清流の水が和音ならびとも

青春を忘れることなく 秋情に溺愛することなく

夢と美の空氣のなかに

過ぎゆく光芒の閃きを數へよう。

冬華孤香

霜枯の野邊の

藪蔭の叢の間に孤り匂ふ

白く杳かな夢のごとき冬薔薇。

冷風もこゝは避けてとほるのか

何時來てみても變らない姿容である。

朝霧に爛々と濕つて

不思議な白蛾の翅ばたきをみせ、

晝の晴れた空をうつして

仄かな仄かな神祕の青に輝き、

黄昏の夕映には薄紅の妖精の瞳になる。

時刻の推移で輪環こそ變れ、

繼ぎ繼ぎに咲きうつるのか

何時來てみても變らない姿容である。

霜枯の緒褐の野邊

祕かな藪蔭に 孤愁の光りもて匂ふ

白く白く幻のごとき冬薔薇。

日曜日の午後

桃園の春

園丁は遅れ咲きの水仙を手にとって
垣際の鶏舎に晝の餌をまいてゐた。

蒼穹の涯に紫紺の山脈がたゞすまひ
そこに白光の富士が見えた。

靈山は雪まだ寒い

水仙は桃李と微聲で嘆き語つた。

圓らかな眸で園丁は早春をかいだ

桃園は花に埋れて錦繪の皿である。

風の生れるところ

童子が土堤を鞠のやうに轉つて
蒼空とぶつつかつては何か喚ぶ。

萌え出た葉のひと葉にゆらぐ微風、
童子らは愉しく語り合つて
風の生れた所をきくのである。

燕ら寂しい純情をなけ合ひ 小さい戀を抱き合ふ
遠國の空から
泉のやうに生れ溢れるのであると云ふ。

童子らは波の子のやうに轉つて
若草の土堤にももの哀れを知る。

樹 木

ふと通つた貧民窟の
せまくるしい路地の片隅に
わたしはいつほんの
悲しい來歴の樹木をみいで
その姿に孤をみいで、

苦しげに慄へてゐる樹木と
わたしのみすほらしい風貌を考へて、
愛を求めぬ心は
人間でも植物でも變らないのだと思つた。

あゝ貧民窟の片隅に
なよないと育つてゆく
少女のやうな樹木よ
生きすみの身は悲しい。

釣魚

崖際に垂れ咲いた山吹は
燈火のやうに明るかつた。
寥しく愛に疲れた心は
雲の切れた空の青さを仰ぎ見た。

早曉から釣絲を投げて
薄暮になつて了つた。

(魚族は瀬を溯つてその水窟へ戻つて赴く)
空の魚籠を提げて歎きつゝ歸る心は
平穩に和やかに住まふ處さへもなく

たゞ眼に映する自然の風象に
しんしんと涓滴のごとく涙流れたのである。

希臘模様の壺

美しい印度の姫が
若い旅人に憧れて
泣きの涙をくみためた傳説の壺である。

今それを縁に据ゑれば
庭の年を経た樺の翳が
くろぐろとおほうて
銀ねすみいろの光澤を放たせる。

僕はその壺を心にもち乍ら

縁に置いて見ることが出来るのです。
けれど何時までもみつめてはゐられない
僕から滴る涙が 爛々とそれにたまつてゆくから。

夕暮 古代希臘模様の壺の縁に
何所からか一羽の白い小鳥がやつてきて
さかしげに首をたれる
僕はこの淋しい景情をひとり楽しんでゐます。

紫
煙

秋雨が餘り蕭條なので
吸ひなれぬ葉巻煙草を
客間の磨かれた机に凭つて煙さう。

色彩美はしい落葉樹の葉や

藤棚のすがれた莢實は

疲れ切つて白晝の夢を見てゐる。

秋花は散り果てて

雑草のみ叢々と地をおほふのである。

かゝる傷心の點景を

吸うてただ吐くのみ
の葉巻の煙で
秋雨の一日を煙してしまふ。

秋 日

母が活けた一輪挿の菊に

銀の花瓶の燻ほれた光りに

秋がそと鋭ぎすまされて光つてゐる。

正午過の陽射は明るく匂つて

時計の秒刻が冴々聞える物靜かさに

時折 蜻蛉が障子にぶつつかつて來るのも知れる。

庭の葉雞頭がどつと映えて

障子に照りかへしが來るので

空は張り裂けるやうな青さである。

靜謐な人の情の胸打つ秋日和

繻とく異國の物語に涕泣する机前

ひそひそ秋の哀歡に身を溺らせたのである。

月の花火

桐の潤い葉の隙を縫うて
泳ぐやうに風が流れ去る、
浴後の裸身で椽に立つて
夕風を浴びて立秋の黄楊の月をみる、
數知れぬ星座の言葉ない運行は
迷夢に逍遙ふ私の心を
鮮明に神祕に誘ふのである。

上弦の細月が空を斜めに傾く時刻
紅青の花火が音もなく打上けられる、

逝く夏を愛惜して童兒等は
町の廣場の叢に
小さい花火の筒を置く。

寥秋瞑思

僕は日向に瞑思してゐて
心の何處かで頻りに鳴る時計を聴いた、
秋も深くなつた——
その寂寞の溢れる
卵黄色の大氣のなかに
瀟々と疾み傷いた植物の嘆き
韻々とひびく機械のやうなその音調。

僕は蠟顔に滴る涙を知つて
何處かへ消失して逝つた純情を呼び醒まされた。

秋、人みななの中に 祕かに慕情の偲び入る頃
鍊金の道者のひとすぢの熱情を抱く
そのかなしい道程に
ひやうひやうと鳴る金製の時計を聴いた。
晶石のやうな清朗さに身を透澄して
僕は寥秋に昏々と眠つてゆく。

定 住

東方の國に
かゝる寂しき思想の人住みけり。

秋情點景

蜻蛉の翅がきりきり
草原 丘陵の上の蒼空に光るやうになつた。
童兒等はいち竿をもつて
敏捷に走つて清爽な空氣を破る。
推移する幼年時代を追ひかける
その繊細な竿の震へをみよ。

蜻蛉の翅がきりきり
草原 丘陵の上に美しい夢を描くやうになつた。

海邊の寂寥

午睡のけうとい眼覺めに
庭に流れて來る潮騒は靜かであつて、
向日葵の花が明るかつた。

總ての想念の破綻とか弱い病葉の身で
遙々海邊に沈黙の愛情を享けようと
寂寥の人の群に交つて來たのである。

白い梨果の皮膚は
僕の瘦せた掌の上で

爽やかにして驚異を秘めた
北國の雪を憶はせてゐるし……

故山に於て藝術に傷ただん星霜を
今、黄昏、裏山に頻り顫ふ鯛の聲音に
黙々と追想した。

南方の大いなる潮流に近き小街に侘び住んだ
僕は寂寥に満ちた生涯を、
祖先の瞳に似た海にも聽いた。

またしてもそことない潮騒は
花さへ明るい海邊の夕 庭苑に擴がつた。

日曜の午後

早朝からの思索や幻夢に軽く疲労して

不意と縁先に出たのである。

母の愛育した二坪の蔬菜の青き喜悅

伸び擴がつた枳殻の芽の生氣

空はこれらを映して淺黄に澄徹してゐる。

難解な哲學を読み、下手な詩作に消耗した心も

やがて晴朗と落着く頃、

折から配達して來た子供の掌から

山羊の乳をとつて靜かに飲まう。

昨宵からの雨の爽快に晴れた日曜の午後はいい。

忘れられた玩具

雑草の陰 女兒らが忘れて行つた自鳴鐘は

青い筵の上にはたはたと鳴つた。

夫婦事にも飽いたのか樺樹の根元に棄てられた

夢多い悲しき玩具の群は

時の刻みを聴いて

夕暮が近寄つても凝つとしてゐる。

新月は樺樹の梢にのぞいて

優しい眉を思はせる。

ふと憶ひ出される幼童の日。

その瞬間の甘い憂愁のうへを
風に乗つて流れ響いて来たは遠い老鶯
若き日もかくて薄暮を迎へるのであるか。

生籬の側 庭石の薄濕つた苔の蔭で

蟻は今、夜雨を呼んでゐるのだ。

腐蝕されゆく繪卷を惜しむ想ひは

忘れた女兒らの心を呼び戻して

雑草の中から その部屋に

美しい玩具を納めさせやうと云ふのである。

便りの來ない夕

便りがひとつも來ないで暮れて逝つた夕、
廻らした枳殻垣の圓い新芽に
十夜の月の映る寂心の夕、
庭隅の窪地に褪せた花葩の堆積つて
幽かにそよぐのも果敢ない時、

兒童等の繪本を誦み乍ら
小學校の頃、覺えた幾つかの歌謠をうたひ、
妹の活けた盛花を床間に見出でて
僅かに心和むのであるが、

夜になつて全く思ひがけない刻、
「郵便！」と明日の喜悅へ
懐かしい鮮かさをもたらすのは、
興奮して徹宵眠れないのである。

寂心遊歩

叢林のなかを侘び歩き
流るゝ風を緑葉の香に知つた。

月も織細に霞へて 淡く
宵を渡つて何所にか消えるのか、

強い野茨の花が白うひりひり匂つて
何となく寂しさの満ちて
胸いつばいの夕暮である。

古雅な茶會にも臨筵したい想ひを抱いて
叢林のなか風の流れに添うて
寂心の旅人のやうに歩き出た。

南風の頃

宵は雲母をはぎとつて
もう風は南の暖かいいろを
青ばんだ朝の籬の上へ
潑刺と撒布して喜びの聲をあける。

庭隅に椿は赤色燈の光をもつて匂ひ
山吹は崩れた築地のかげに
線香花火の明るさでひらく。

田舎の家は古城廢址の静けさで

南風渡る淡彩の春を
人は生々とした眸を見交し乍ら
朝の生活へ清爽な行進曲をつとける。

藤花煙雨

——草臥れて宿かる頃や藤の花——

崖際に藤の花が雨に煙つてゐて
築には銀鱗の魚もかゝらない。

旅路の翁は藤花を嘆いた
僕は虐けられた生涯の傷ましさと
疲れた心を思つて
愛なくして暮れる春を
散歩の途上嘆くのである。

傘を叩く雨の音の隙から
濡れて動かない箕の漁人と
熊笹の繁みに鳴る雨を心ひそかに見た。

朝を生む

朝は夜行列車の玻璃窓から まづ
水いろの清楚さで氾濫をはじめ。

山は灌木の命を包んで

果敢ない鳥獸の生をつつんで

平原の涯に静かな容姿をととのへ

うすうすと匂つてゐる。

敏捷な一號の列車は

眼覺めの静寂と新鮮さの平原を

立ちこめる狭霧のなかを 疾走する。

かゝる時 朝は

とうとうと水いろ磁器の光彩で

列車に乗込み 氾濫し

平原の村驛に順々と降りてゆくのである。

雲
雀

びいちく、びいちく、びいちく、びいちく、
蒼穹が圓く微睡んでゐるなかに
ひとりたのしげな早春のささやきである。

やはらかく白い雲は

雪解けの小川の水にうつつてゐる、
水は靜かにほがらかな歩並でゆく。

野の木々がすつかりみづいろに病んでゐる、
惱ましい眺めではあるが、

耳をすますと

さいさいと土壤をおしのける

植物の吐息がきこえる。

この早春を禮讚する唄はうれしい。

びいちく、びいちく、びいちく、びいちく。

山と空

山は幾千年、時代の夢をつゝんで
杳かにはるかに 悲しく
平原の涯に山脈をつらね、
空は萬年の自然の翳をきざんで
はるかに青々と喜ばしく
その上に穹窿を駛らせた。

山が薄青く溶け入るところ
空もあをく滲み入つて
悲しみと喜びは擁きあつた。

あゝかうして人間と人間も
やはらかに心とけあつて、
憎しみや偽りは姿をひめ
はらはら涙ながるゝ、眞實の
新鮮な春の生活を迎へたまへ。

塑像と蜻蛉

悲寥に割られた塑像の
白く傷ましい破片が散らばつてゐる。
畫室の窓は閉されて
眞晝になつても蔦の葉が纏つていつても
微動だにしない。

飴いろの陽射に
細かく咲いてゐる野菊、
籬のみそ萩は枯れ落ちて莖のみ静かである。

何處からか流れてくる
童兒の戯れの叫音が
先刻から塑像の破片の上に来て止まつた
紅い蜻蛉の翅を震はせてゐる。

冬の顔貌

白木蓮の蕾簇が

柔らかかに白毛の猫の睡眠のやうに

春陽をふつくらと呼吸してゐる。

その梢の果に暈けた白雲

蒼空はとうろりと艶めかしい情慾の瞳。

きやら、きやら……

(晴朗な爆音で飛空機が

市街の一角の上空を通過するらしい)

病院の窓から一齊にのぞいた患者の顔貌

並んでゐる憧憬の傷ましい悲しげな表情
彼等の感情はまだ冷い冬に彷徨してゐる。

病者の顔がひつこむと

(ぶうん、ぶうん蜜蜂の喘ぎに似た遠い爆音)

庭園にはまたひつそりとした空気に

白木蓮の蕾簇が睡眠してゐる。

花苑廢情

春は水色の舞踊の裳裾が寥しく、土壤は絲遊の哀歡に胸を傷ませる。

紅薔薇の横顔、風信草の思惟、ちうりつぶの惰眠、福壽草の金壺、菩提樹の戲畫、梅の郁々とした薫香、蒲公英の純情、紫雲英の童話、堇薺の慾情。

春 春 陽春 …… 春 春 陽春

密蜂の黄色な軍隊 黒き眼ざめの胡蝶の群

藤の房に寒い印度人の瞳の新月 闘手の狂ひに赤い天とう

虫の匍匐

花は今爛れて、小徑も色彩と薫香に亂れるとき

蒼穹の青銀にすべて夢玲瓏と流れるとき

花苑に今 凡ゆる情感は廢れる。

六月の曲譜

螢は草の葉蔭に明滅し

新月は野茨の白い花瓣を散らし

鮮らしい田園の曲譜は弾かれる六月の薄暮。

盲者

星群の高嶺に降りつもる

夜が来た。

恐怖のみちみちた地の上を

悩ましい暗黒を秘めた夜が訪づれた。

河流は霧と散じ 魚は死んだ、

風は失せて 生物は悉く地に倒れた。

かうして私は盲目めくらとなつた、愛慾あほのために

いつ明けるともない夜に今日も自己おれを索める。

不許複製

昭和五年十二月五日印刷
昭和五年十二月十日發行

【定價金六十錢】

著者 柴山晴美

發行者 飯尾謙藏

東京市小石川區江戸川町十八番地

發行所 交蘭社

振替口座東京四〇二七九番

印刷者 加藤幸則

東京市小石川區久堅町一〇八番地

▲處女地の雪▼

共同印刷株式會社印刷

交 蘭 社 詩 歌 書

著者	歌集	名	定價	送料
吉井 勇	歌集 玉	蜻	一、七〇	一、二二
中原 綾子	歌集 深	淵	一、四〇	一、二二
太白社編	現代名家女流短歌集		一、四〇	一、二〇
生田 蝶介	短歌の作り方と味ひ方		一、五〇	一、二二
萩原井泉水	俳句の新らしい味ひ方		一、九〇	一、二四
四條 八十	新らしい詩の味ひ方		一、六〇	一、二二
野口 雨情	童 謠 作 方 問 答		一、二〇	一、二〇
勝田 香月	新らしい詩の作り方		一、〇〇	一、一〇
中西 悟堂	啄木の詩歌と其一生		一、五〇	一、二〇
横山 青娥	一茶の俳句と其一生		一、五〇	一、二二
中西 悟堂	芭蕉の俳句と其一生		一、九〇	一、二四
西條 八十	詩 歌 用 語 辭 典		一、二〇	一、一〇
横山 青娥	詩 歌 類 語 辭 典		一、五〇	一、一〇
横山 青娥	全・外來語新辭典		一、二〇	一、一〇

終

